

一般  
寄稿

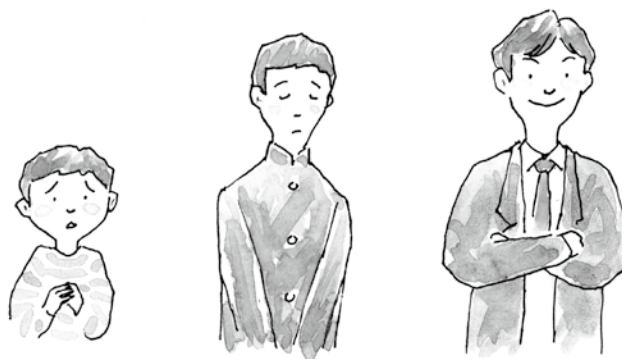
教育研究所

# 小学校・中学校・高等学校の 系統的キャリア教育に関する一考察 —「時代」の変遷と自己の形成に焦点を当てて—

峯村 恒平

Kohei MINEMURA

教育研究所助手



## 1 「現代」における能力と自己

明治期に入った直後の明治5年、政府によって「学制」が発せられた。学制によって設置されることになった「学校」という制度は、近代市民社会においてあらゆる側面で非常に大きな意味を持つことは、改めて語るまでも無いだろう。身分、家柄、地縁が生まれた家によってほぼ決まるという、前近代的な世襲的な身分の再帰性は、学校制度の導入によって、理念的には選抜原理の中に融解してしまった。

選抜原理における選抜とは、後天的に身につけた能力を統一的な試験によって計るものである。天野がいうよ

うに、その中でも学力試験はメリトクラシー社会における人材選抜方法として最も適切なものと考えられ、そしてまた個人に対する公正で合理的な能力判定基準として今日まで承認されてきた（天野，2002）。

しかし、社会的には公正であるように見えても、そもそもその社会の成員が同様の社会的背景をもっていないとすれば、選抜が特定の層によって有利になることは当然あり得る。現代的な先天的社会差、である。今日的では、「階層」、「ジェンダー」、「差別」、「地域」など、そしてそれぞれの問題について、ローカルにもグローバルにも、問題が認識され、研究の蓄積がされてきているところであり、必要なアフターマティブ・アクションによってその回復が試みられたりもしている。

一方で、選抜によってはかる「能力」も変化、多元化

表1 「近代型能力」と「ポスト近代型能力」

「近代型能力」	「ポスト近代型能力」
「基礎学力」 標準性 知識量、知的操作の速度 共通尺度で比較可能 順応性 協調性、同質性	「生きる力」 多様性・新奇性 意欲、創造性 個性・個性 能動性 ネットワーク形成力、交渉力

(本田, 2005 より)

しつつある。今日では大学入試において「AO入試」が拡大の一途をたどっており(文部科学省, 2012)、あるいは就職において「面接試験」が複数回課されるなど、筆記試験によってはかることができる「能力」が全てではなくなってきた。本田(2005)がいうように、求められる能力が表1のような「近代型能力」から「ポスト近代型能力」へと、変化、多元化しつつあるのである。これは単に選抜の変化として捉えることは適切ではない。本田が言うように、これは「ハイパー・メリトクラシー化」が進む「ポスト近代」社会であって、社会史的な変動である。

そこで本論では、近代、そして「その後の時代」という社会史的な文脈性の上で今日求められる能力や、その公正さも含めた「自己」の在り方について改めて考え直しながら、今日の学校制度の中で行われるキャリア教育とその系統性もたらず意味について、検討をしてみたい。

## 2 「近代」の特徴を考える

近代の特徴について考えるに当たって、重要な示唆を与えてくれるのはA.ギデンズの論であろう。ギデンズの著書『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』(A.ギデンズ, 1990=松尾ら訳, 1993)を参考にしながら、その特徴についてまずは確認したい。

そもそもギデンズが言う「近代」とは、3つの特徴を持っている。第1に、「時間と空間の分離」という特徴

である。近代以前の社会では、時間と空間は緊密に結びついてきたために、当然のことながら、物理的に離れた場所に情報を伝達するには時間がかかった。しかし、例えばメディアの発達により、物理的に離れた場所にも瞬時に情報を伝え、しかも世界規模で社会関係を取り結ぶことが可能になった、という点である。

そして第2に、「脱埋め込み化」である。ギデンズの言葉をそのまま引用すれば、「社会関係を相互行為の局所的な文脈から引き離し、時空間の無限の拡がりの中に再構築すること」としている。「社会関係を相互行為の局所的な文脈から切り離し」というのは、前近代的な社会関係が極めて空間的に閉鎖した中にあり、しかもその空間内での相互行為がそのまま文脈性を意図していたということを内包している。例えば、とある農村で野菜を作ったとき、農家同士では物々交換をしたり、あるいは近隣に「おすそ分け」をしたりする、という程度の話である。しかし、これが近代に入ると、「貨幣」というシステムが登場し、同時に経済の発達とともに流通という概念も登場してくる。結果として、例えば農村で野菜を作ったときに、流通する全く知らない土地で野菜が売られ、食べられるようになるのである。あるいは豊作であったり、不作であったりしたら、全く知らない土地で野菜が多く安く流通したり、値段の高騰で低所得者がひもじい生活を送る羽目になっているやもしれない。このように、閉鎖的な空間で局所的な文脈に埋め込まれていた行為と結果が、時空間的に無限とも言える未知の拡がりをもった「社会」の中で再構築されることが、この「脱埋め込み化」という概念として説明されるものである。実際にギデンズは、貨幣などの標準的な価値を持つ

た交換システムとしての「象徴的通標」の登場を、脱埋め込み化のメカニズムとして説明している。そしてまた、科学的技術的知識に代表される「専門家システム」の登場も、メカニズムとして挙げている。これは、前述した「農家」を例にすれば、近代以前は、家族システムとしての農家であり、近代では「農業を職とする人の家」になっている、ということの意味しているだろう。そして、このような専門化は第3の特徴を浮き彫りにする。

その第3は、「制度的再帰性」の登場である。近代以前では伝統や慣習といったものが行為の正当性を保証してきたが、今日では、その行為がどのような意味があるのかといったことが、最新の情報なり専門知識に照らして、正当性が問われることになる。専門家システムの登場というのは、この正当性を担保するという意味で、非常に重要な意味を持つことは語るまでも無い。そして、正当性は、絶えず問い直される。ギデンズの再帰性について説明した片瀬（2010）の言葉を引用すれば、「近代社会はたえざる自己点検・評価を組み込んでいるという意味で『再帰性』が制度化された社会」であるといえる。

このような近代の特徴が徹底された、近代の次に訪れた社会を、ギデンズは後期近代（Late Modern Age）と呼びながら、さらに『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』（A.ギデンズ，1991＝秋吉ら訳，2005）において、考察している。次節ではその中で登場する「自己の再帰的プロジェクト」という考え方に触れながら、後期近代における自己の在り方について考えてみたい。

### 3 『自己の再帰的プロジェクト』

近代以前の社会では、身分や職業も、ある種の「伝統」によって継承され、身分移動は閉鎖性をもっていた。これはさらに言い換えれば、伝統や身分秩序というものが、人々の生きる指針や意味を付与していたと言い換えることも出来るだろう。この言い換えが何を意味するのかというと、前近代社会が、片瀬（2010）が言うように「（前近代社会が）『自分とは何か』という問いへの答え

はわざわざ探すまでもなく、出自や身分といった外的な基準によって自然に決められていた」ということを意味している。しかし、近代に入り人々のアイデンティティそのものも、外的な基準という埋め込みから「脱埋め込み化」が起こり、脱埋め込み化が進展する中で、時空間の無限の拡がりの中にある多様な選択肢の中から自分とは何かを問いかけ、あるいは自分を再構築する必要にかられる。脱埋め込み化が徹底されていない、例えば学制が導入されたばかりのような近代社会においては、単純なメリトクラシーが妥当なものであるとして、高学歴であることや資格を有することといった基準によってギデンズがいういわゆる自己の存在論的不安をそれなりに満たしうるであろうが、メリトクラシーが大衆化する、例えば今日の「大学全入」の時代のような社会になると、学歴や資格を取得するといった、単純なメリトクラシーで満たされる基準そのもののみでは、他者との代替可能性が生じ、自己の存在論的不安を満たしえない。もっと具体的に言うならば、脱埋め込み化が徹底されていない近代社会においては、高学歴であることそのもので、良い仕事、良い生活が概ね保証されるが、脱埋め込み化が徹底された後期近代社会においては、自分以外にも高学歴な人がどこかしこ存在し、高学歴であることそのものを持って、自己の存在論的不安を満たしきれず、高学歴であること「以外」の何か、を常に自己アイデンティティとして探究する必要に駆られるのである。このようにも、脱埋め込み化が近代社会に徹底されたとき、自己とは何なのか、他者と自分は何が違い、そして自分は何をしてきたのかといったように、自己を問い続け価値付けていくことがさらに重要となる。すなわち、「自己アイデンティティ」というものを絶えず問い続ける必要がある社会の到来そのものである。ギデンズは前掲の著（A.ギデンズ，1991）で、このような過程を「自己の再帰的プロジェクト」と名づけ、自己の生活史に基づく再帰的な自己の物語を見出していく組織化の過程を強調しているのである。まさに、冒頭表1で示した本田の論のように、自分がどのようなことをしてきた、どのような人間であるから、「多様性・新奇性」をもち、「意欲・創造的」であり、「個性」的であり、「能動的」であるのか、それを常に自分自身の生活史、生き様の中で問い続

けながら、「自己アイデンティティ」として形作っていくその過程こそ、今日の社会において極めて重要なものとなってくるのではないだろうか。

## 4 系統的なキャリア教育に向けて

このような社会史的な議論のうえで、改めて今日の政策動向や、系統的なキャリア教育について若干の考察をしておきたい。今日の日本におけるキャリア教育は、平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」にもとづいて、各種政策的な取り組みが進められている。ここでは、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育」とし、その具体的な方向性として、3点を示したが、そのうちの1点が特に学校におけるキャリア教育の内容を示したもので、「①幼児期の教育から高等教育まで体系的にキャリア教育を進めること。その中心として、基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会・職業との関連を重視し、実践的・体験的な活動を充実すること。」とした（中央教育審議会、2011）。ここでいう基礎的・汎用的能力とは、答申では具体的に4つの能力を含んでいるが、その中の1つに「自己理解・自己管理能力」が示されている。この内容について、詳しく見ていこう。

自己理解・自己管理能力の具体的な内容について、答申では、「自分が『できること』、『意義を感じること』、『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」であるとする。これは前節で見てきた後期近代における自己アイデンティティの形成に極めて近い内容が含まれており、自分がこれまで何をしてきて何ができるのか、自分のどのような経験から何に意義を感じるのか、そのような自己の文脈の中で、自分は何をしたいのか、といったことを自分自身で理解し、そして今後のために更

に学ぼうとする主体的な力を示しているように見える。今日のキャリア教育においては、後期近代という社会背景を踏まえた上で、このような自己理解・自己管理能力を含めた、基礎的・汎用的能力を育むということを、幼児期の教育から高等教育まで体系的にすすめることが求められているのである。

さらに実際に、国立教育政策研究所（2016）が示したパンフレットでもこの過程が重視されている。そのパンフレットは「『語る』『語らせる』『語り合わせる』で変える！キャリア教育」とされ、このキャリア教育の意義について「子供たちが自ら気付くことを促し、主体的に考えさせ、それを成長・発達へとつなげていくこと」としている。ここでも、やはり子どもたち自身が自ら気付く、考えるという過程を重視しており、単に進学や就職の試験を突破していくというだけではなく、自らの在り方を考えるということを極めて重視しているのである。またこのパンフレットでは事例として、小学校、高等学校それぞれに「振り返り」が位置づけられていることや、中学校の事例においてもキャリアノートを利用した事例等、自らの語りを「言語化」することが重視されており、自らの思いを言語化によって価値づけるという活動が重視されているということも、特筆すべき点である。

## 5 まとめにかえて

本論では、近代、そして後期近代の特徴を踏まえ、「自己の再帰的プロジェクト」という、自己アイデンティティを、自分自身の生活史、生き様の中で問い続けながら、形作っていく過程の重要性、について述べた上で、今日の政策動向としても、実際に自己アイデンティティを形成していくことも含意されたキャリア教育が提言されていることについて述べてきた。今日は単に学歴、資格といった目に見える基準や、学力テストの点数が高いということだけでは進路、就職には立ち向かっていけない社会が到来している。そのような中において、幼児期から高等教育までの一貫したキャリア教育の中で、自己アイデンティティを常に問い、形成していくこ

とがますます重要となっている。キャリア教育も、単にどのような進路があるのか、自分の適性は何なのかといった、表面的な教育だけではなく、自分を形作っていく、自分自身を自分自身が語り、そして考えるというキャリア教育がますます重要となっており、今後さらに政策的な充実の中で、各学校の実践が求められるようになっていくだろう。

#### 【引用文献】

- ・天野正輝, 2002『教育評価論の歴史と現代的課題』晃洋書房.
- ・片瀬一男, 2010『社会化とアイデンティティ』岩井八郎, 近藤博之『現代教育社会学』有斐閣ブックス.
- ・Giddens, A., 1990, The Consequences of Modernity, Polity Press. = 松尾精文, 小幡正敏, 1993『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房.
- ・Giddens, A., 1991, Modernity and Self-Identity: Self and Society in Late Modern Age, Polity Press. (= 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 2005『モダニティと自己アイデンティティ: 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.
- ・国立教育政策研究所 (2016)『「語る」「語らせる」「語り合わせる」で変える! キャリア教育』『変わる! キャリア教育』ミネルヴァ書房.
- ・中央教育審議会 (2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)』
- ・本田由紀, 2005『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版.
- ・文部科学省, 2012『AO入試等の実施状況について』中教審高大接続特別部会 第4回資料.